

---

# 学校のカイ談

水飴ほたる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学校のカイ談

### 【Nコード】

N5463M

### 【作者名】

水飴ほたる

### 【あらすじ】

第17回電撃大賞の一次選考でボツった作品その2です。

今後の方針のためにも、感想などを頂ければ幸いです。

## 第1話

「はあ？ 心霊現象？」

ここは、都内にある小学校の一つ、笹宮ささのみや小学校六年二組の教室。給食時間中の出来事だった。二×二の四人組の席になつて給食を食べているグループの中で、自分の前面に座つて給食を食べていたミサトに対して、カズヤが呆れた様な声を上げた。

「そうなのよ、カズヤ。主に図書室を中心に起きているんだけどね。何でも、実際に心霊現象を見たつていう五年生の話だと、夜中誰もいない図書室で呻き声が聞こえるだとか、窓から青白い人影が外をじっと見つめているだとか言つて、今結構、うちの学校で噂なのよ。知らなかった？」

牛乳パックをストローで吸い込み、視線をカズヤに向けるミサト。一方のカズヤはコッペパンをかぶりつきながら、随分と無関心な様子で応えた。

「アホらし。そんなのよくある話じゃないか。だいたいそういうのは、ほとんどが本人の見間違いか、思い込みによる勘違いが原因だ。そんな騒ぎ立てるほどのものじゃないつーの。」

「ふふん、でも、そんなカズヤも『これ』を見たらきつと反論できないわよ。」

そう言いながら、鞆から携帯電話を取り出すミサト。そして携帯電話を操作し、一枚の写真が映し出されたディスプレイ画面をカズヤに見せる。画面を向けられたカズヤが、恐る恐る画面に視線を移した。

「ふん、どーせそんな大したもんじゃないんだろ………つて、キモッ！」

カズヤが見せられた写真に絶句する。写真には、校舎の中から、外にいる撮影者を見つめている、少年とおぼしき人間の青白い表情が克明に映し出されていた。写真を見たカズヤがミサトに視線を戻す。

「いやいやいやいや…。お前これはヤバいだろ。こんなん、除霊レベルだつて、マジで。早くお被いしないと俺ら祟られるぞ。あ！ 塩！ 塩も持ってこないと！」

うるたえるカズヤをミサトが落ち着かせる。

「もう！ 落ち着いてつて、カズヤ。こんなの、ただの写メールの写真なんだから、そんなに霊力なんか無いつて。」

「バカ！ お前、霊をナメるんじゃないぞ？ 霊はいくらでもお前を祟り殺す事が出来るんだからな？ 悪い事は言わん。早くその写真を処分しなさい。」

「イヤよ。」

ミサトの携帯を取ろうとするカズヤ。対するミサトは、さっとカズヤの腕をかわし、そそくさと携帯を鞆の中にしまってしまった。しばらくして、カズヤが再び口を開く。

「で？ 要するに、お前はこの心靈写真の正体を暴き出そうとしているのか？」

デザートのプリンンのフタを開けながらカズヤがミサトに尋ねた。

「そうよ。」

尋ねられたミサトは至極当然と言った表情でプリンを口に含みながら答えた。そんな自信満々の様子にカズヤが首を捻る。

「そうよつて、お前なあ…。どうせ、アレなんだろ？ 俺も一緒に来いって言うんだろ？」

「そうよ。良く分かってるじゃない。」

ミサトのしれっとした表情に大きく溜め息を付くカズヤ。

「でもなあ、生憎、俺、今日習い事の習字が…」

「六年二組出席番号十二番、野上カズヤ君の習字の習い事がある日は、水曜日と土曜日の午後五時から約一時間。ちなみに今日は他に何も習い事が無い木曜日のハズですが、被告人は何かこれ以上の答弁はございますか？」

不敵な笑みを浮かべ、にんまりとカズヤを見つめるミサト。そんなミサトの表情に、カズヤが諸手を挙げる。

「…分かったよ。行ってやる。」

「ホント？　ありがとう！　じゃあ、今日の午後九時に校門前に集合ね。」

屈託の無い笑顔で謝辞を述べるミサト。ほとほとこいつには敵わない。そう思うカズヤだった。

夜。午後九時少し過ぎ。初夏に入り、朝夕も大分過ごしやすくなっただとはいえ、やはりどこか肌寒い感じがした。校門の所でカズヤが待っていると、ミサトが道の向こうから走ってやってきた。

「ごめん！　待った？」

ミサトは可愛い青のワンピースを身に纏いつつも、背中のリュックにはスコップやら懐中電灯やら、何やら物騒な物が沢山詰まった黄色のリュックサックをもっさり背負って現れた。

「いや、そんなには待ってねーよ。つーかお前凄いな荷物だな、それ。今からどっか戦争にでも行くのか？」

「うん、まあ備えあれば憂い無しって言うしさ。何も無いよりはいいでしょ。」

「幽霊がビビって逃げなけりゃいいけどな。」

「よーし！　じゃあ行くわよー！」

威勢の良い掛け声と共に、ミサトは校舎へと歩き出していった。校門をくぐり、運動場を歩いている所でカズヤが声を掛ける。

「おい、ミサト。」

「ん？　何？」

呼ばれたミサトが振り向いた。振り向いた顔は実に楽しそうな顔をしていた。

「校庭くらいならこうして入れるんだけどさ。校舎はどうするんだ？　さすがにドアとか全部閉まってると思うぞ。」

カズヤの正論を受けたミサトはチツチツと唇で音を立てて、突き立てた右手の人差し指を左右に揺らした。

「ダメだなあ、カズヤ君は。君、仮にも六年間この学校に通っているんだろ？」

(何でそんなに上から目線なんだよ。)

カズヤはそう思いながらも、ミサトに尋ねる。

「じゃあ、何か方法があるってのかよ？」

「ええ。こつちよ。付いて来て。」

駆け出すミサト。カズヤは心配に思いながらもミサトの後をついていった。

「こつちよ。」

その場所に到着したミサトが、高らかにその場所を指差す。

「こつちよ……。」

「そう。女子トイレの窓。今日、下校時刻ギリギリにここのトイレに入って、窓の鍵を開けておいたの。閉まってなければいいけど……。」

「  
そう言うって窓の縁に手を掛けるミサト。ミサトが窓を動かすと、窓がゆっくりと開いた。」

「ビンゴ。入れるわ。じゃあ、先行くから。」

あっさり不法侵入を宣言し、壁脇にある水道パイプに手を掴むミサト。それから右足を壁に掛けて、勢い良く蹴り上げる。自分の胸元くらいの高さにある五十センチ四方の窓のサッシに左足を掛け、さっと窓の中へと入ってしまった。

「ねえ！ 先に荷物こつちにちょうだい！」

窓の内側からミサトの声が聞こえる。カズヤが側に置いてあるリュックサックを持ち上げ、それを窓の上まで持ち上げた。

「ありがとう。」

ミサトがそれを受け取り、荷物を下へと降ろした。

「ほら、カズヤも早く来なさい！」

中からミサトの声が聞こえる。

(……お前、さっきパンツ丸見えだったぞ。)

顔を真っ赤にしながら、カズヤが水道パイプに手を掛けた。

「…静かだな。」  
女子トイレを抜け、誰もいない廊下を見回しながらカズヤがぼそりと呟いた。

「まあ、そりゃ、こんな時間だからね。はい、カズヤ。これ、持つて。」

リュックから取り出した懐中電灯をカズヤに手渡すミサト。カズヤがそれを受け取る。

「おお、ありがとう。じゃあ、さっそく行くか。」

懐中電灯を受け取り、早速歩き始めるカズヤに対して、突然ミサトがカズヤの首を掴む。

「ちよつと待つて。カズヤ。」

首を掴まれたカズヤの上半体が揺らぐ。カズヤが怒りの表情を浮かべながら振り向く。

「おい、何すんだよ、ミサト！」

「そこ、警備線が張られている。」

「は？」

「つまりね。カズヤが今歩こうとした所は、防犯カメラの映像範囲なのよ。もし、私達が今日こうして忍び込んだって事がバレたら後で絶対怒られるだろうから、カズヤは絶対に、迂闊な行動を取らないで。分かった？」

「でもなあ。どこが防犯カメラの映像範囲内かなんて、生徒の俺達にそんなの分かる訳ないだろ？」

「大丈夫よ。私が全部調べてあるから。どこが映像範囲内で、どこが映像範囲外か。全部この頭にインプットしてある。だから、カズヤは余計な事をしないで、私の指示に従うようにしてくれれば大丈夫。」

（忍びか、お前は。）

カズヤが心の中で脳内ツッコミを入れる。一方のミサトはその間も

只管、事前調査情報を語っていた。

「ちなみに今日の警備員さんは、丸山さんと言って、校内で勤務している三人の警備員さんの中でも、最もユルい警備を行なっている人ね。おそらく今は警備室で、木曜洋画劇場を見ているだろうから、少なくとも十一時近くまでは見回りには来ないはずよ。ホント、今日が片岡さんじゃなくて良かったわ。」

（じゃあ俺は、片岡さんが良かったな。）と言つと、ミサトが怒る気がしたのでカズヤは黙っておいた。

「さ、行くわよ。」

壁の縁を縫うようにして、ミサトがひっそりと歩き始めた。

「ここが問題の写真が写されていた図書室よ。」

校舎二階の突き当たりにある、図書室の入り口の前に立つカズヤとミサト。ミサトが例の写真が写された写メールを眺めながら語り始める。

「この写真を撮った五年生の女の子の話だね。その子は丁度その日、夜遅くまで生徒会の活動をしていたらしいの。それで午後八時過ぎくらいによつやく仕事が終わって、急いで帰ろうとした時に、ふと図書室の窓を見上げると、この写真の男の子がぼやあくって窓に浮かび上がっていたんだって。」

「へ、へえ〜っ…」

話を聞いていたカズヤの目は終始空ろだった。

「…あれ？ カズヤ、怖い？」

「こ、怖くなんかねえよ！ お、お前こそ早くこのドア開けるよ。」

…俺ら、かれこれもう十分くらいずっとこうしてるぞ。ほら、早く！

「え！ いや、やつぱらこういうのはさ、男の子がやるのが自然って言うのかなあ？ ほら。私だって一応か弱い女の子じゃん？」

（パンツ丸出しで窓に乗り込むヤツの、どこが女の子らしいっつー



んだよ。) そんな事を考えるカズヤだったが、ここで踏みとどまっていても埒が明かないため、仕方なくドアのノブに手を掛け、ゆっくりとドアを開閉方向へ移動させようとした。ドアに小さな隙間ができ、ドアが大きく開かれようとしたその時、二人の意識はどこか遠くへと飛ばされた。

二人の脳内に不思議な記憶が流れ込んできた。

図書室の窓口で受付をしている女の子。そこへ、一冊の本を持って駆け寄ってくる男の子。

男の子は顔を赤らめながら、その女の子に図書カードを差し出した。女の子も顔を赤らめながら、その男の子に図書カードを渡し返した。図書カードを受け取ると、男の子は走って図書室の外へと出ていってしまった。

そこで、記憶はプツリと途切れた。

「こらっ！ 君達！ こんな所で寝ていちゃダメじゃないか！」

その声にハツとし、二人が目覚めると、そこはドアの閉まった下駄箱の外だった。

「あれ？ ここは？」

カズヤが呆けた様子で辺りを見回す。隣には同じく呆けている様子のミサトが座っていた。ミサトのすぐ脇には来る時持ってきた荷物も置いてある。目の前には、『丸山』と書かれた名札を付けた警備員が、携帯ライトで自分達を照らしていた。丸山がカズヤの右頬を軽く二回叩く。

「目が覚めたかい？」

「…え、ええ。」

曖昧な返事をするカズヤ。

「じゃあ、もう急いで帰りなさい。木曜洋画劇場もすっかり終わって、今は十一時過ぎだ。さすがに親御さん達も心配しているだろう。」

「は、はい。ありがとうございます。」

「は、はい。ありがとうございます。」

「大丈夫かい？ 家まで送っていいのかな？」

「いえ、大丈夫です。それでは、おやすみなさい。」

丸山に一礼し、二人は校舎の外へとゆっくり歩いていった。

学校近くの公園。煌々と付いたライトの下で、カズヤとミサトがベシに腰を下ろしている。

「見た？」

恐る恐るカズヤが尋ねる。

「見た。」

ミサトが前をぼんやりと見ながら答える。

「なんだってんだよ、あれはぁー！ー！ー！ー！ もう、めちゃめちゃ怖かったっつーの！」

緊張の糸が切れ、大声で叫ぶカズヤ。

「ホントよね。ナニ？ あの記憶？ 何でドアを開けたら、あんな記憶が脳内に流れてくるのよ！ ありえないっつー！ー！ー！ー！のおー！ー！ー！」

こちらも深夜だと言うのに人目を憚らず、大声で叫ぶミサト。しばらくお互い、思いの丈を吐露してから、ようやく二人は落ち着きを取り戻した。

「…で？ 結局あの記憶はなんだっただろうな？」

近くの自販機で買った炭酸飲料を飲みながら、カズヤが問い掛けた。問い掛けられたミサトがレモンティーを飲みながら答える。

「…普通に考えると、あの記憶の中にいた男の子が、この心靈写真

の男の子って事になるわよね。じゃあ、この男の子は現世に留まっている自縛霊か何かなのかしら？」

「まあ、普通に考えるとそうだろうな。ただ、そうになると、あれだけ強烈な力を持つ自縛霊は、俺らには手の打ちようが無いぞ。誰か専門の霊媒師とかを呼んだほうが良い。」

「…そうね。」

俯き、黙ってしまふミサト。

「とりあえず、今日はもう帰ろうか。明日も学校があるんだし。」

「…うん。そうだね。」

「じゃあ、また明日。」

「うん、また明日。」

こうして、不思議な体験をした夜は静かに暮れていった。

## 第2話

次の日。金曜日。朝。学校に登校すると、二人は早速職員室に呼び出された。理由は勿論、昨日夜遅くに学校に忍び込んだ事に対してのお咎めだった。一見完璧に見えた彼らの不法侵入だったが、ミサトのリュックサックに書かれていた『六年二組 橘ミサト』という名前を、警備員の丸山が覚えていたため、こうして足が付いたのだ。つた。

「全く、幼稚園児じゃないんだから、持ち物に名前なんか書かなくてもいいだろ。」

担任の説教を終え、職員室から出てきたところで、カズヤが憮然とした表情で、隣を歩いていたらミサトに声を掛けた。対するミサトも、随分とムスツとした表情で答えた。

「何言ってるのよ。『持ち物にはちゃんと名前を書きましょう』って、一年生の頃からずっと言われてたでしょ？」

「で？ 今日たっぷり怒られたからな。さすがに昨日の今日で夜の学校に侵入するのはマズいと思うぞ。どうするんだ？」

「うん、ちよつとアプローチを変えてみようかなって。」

全く反省している様子のないミサトが、思案顔を浮かべている。

「アプローチを変えるって、どういう事だ？」

「ほら、カズヤも見ただじゃない。あの脳内に流れ込んできた不思議な記憶。」

「あ、ああ。」

「あの中で、図書委員の女の子が『太刀川』って名札を付けていたでしょ？」

「あれ？ そうだったけ？」

カズヤが首を捻る。

「そう。『太刀川』って、珍しい苗字だし、きっとそんなにいないと思うの。」

「……ってことは？」

「そう。卒業生の名簿を片っ端から調べて『太刀川』っていう苗字の女の子を見つけ出せば、何らかの手がかりが掴めると思うのよ。」

「へー。それは大変だ。じゃあ頑張つて。」

感情を押し殺した抑揚の無い声で喋り、その場を立ち去ろうとするカズヤ。しかし、寸でのところでミサトに首を掴まれてしまった。

「勿論、一緒にね。」

カズヤには、その時振り向いて見たミサトの表情が悪魔に見えたと言っ。

「よお、カズヤ。昨日は災難だったな。」

カズヤが教室に入り、自分の席に着くと、友人のケイスケが話しかけてきた。

「ああ、全くだよ。」

カズヤはうんざりとした様子で応え、脱力するように机にランドセルを置いた。

「それで、何か収穫はあったのか？」

ケイスケのその質問に、一瞬沈黙するカズヤ。確かに、何か収穫はあったのだが、それを一言一句間違はなく友人のケイスケに伝えた所でおそらく信じては貰えないだろう。そこでカズヤはひどくぶっきらぼうに、

「別に、何も。」

とだけ言つて、椅子に腰掛けた。

「なんだ。つまんねーの。」

ケイスケが随分と不満そうな声を上げる。その時、六年二組の担任、佐藤昇一が教室の中に入ってきた。佐藤の年齢は二十代後半。髪はスポーツ刈りより少し長めのボサボサ頭で、黒縁眼鏡をかけている。何をするにしても全く融通の効かない堅物先生として、生徒達からはあまり好感を持たれていない先生だった。

「げっ！ ヤベツ！ 先生来た。じゃあ、カズヤ。またな。」  
「おう。」

そそくさと自分の席に戻るケイスケ。担任の佐藤が、日誌を教壇に置き、クラス生徒全員の顔を見回す。

「えーっ。皆さん。分かっているとは思いますが、夜の学校に侵入してはいけません。特にカズヤ君と、ミサトさん。いいですね！」  
二人に視線を移し、釘を刺す佐藤。見つめられた二人は小さな声で返事をするしかなかった。

「はい、じゃあ出席を取ります。」

放課後、二人は図書室の資料エリアで、卒業生名簿のコピーを閲覧していた。現在、二十年目まで遡った名簿を調べている。二十一年目の卒業生名簿に手を掛けたところでカズヤが音を上げた。

「もーっダメだ！ ミサト！ 俺ちよつと休憩するから。」  
椅子に大きく背もたれし、体を伸ばすカズヤ。そんな様子のカズヤに、ミサトが呆れた様子で声を掛ける。

「もーっ！ 根気が無いわよね、カズヤは。そんなんじゃない探偵にはなれないわよ！」

（いや、元々なる気無いから。）  
そう言い返したいカズヤだったが、言い返すだけの気力さえも、もはや薄れていた。それから、ミサトだけが更に一時間ほど延々と卒業生名簿を眺め続け、時折メモを取るなどしていた。午後五時少し過ぎ。名簿を見ていたミサトの手がパタリと止まった。

「終わったわ。」

「お、おお。お疲れさん。」

頭を机にうつ伏せていたカズヤが、ミサトの一言で顔を起こした。

「それで、結果は？」

「笹宮小学校設立以来、過去六十年間の卒業生全員の名簿を調べた結果、『太刀川』という苗字を持った卒業生は、九人。その内女性

は四人だったわ。」

「まだ多いなあー。」

椅子にもたれながらカズヤが声を上げる。

「うん。でも幸い、今回は無事に対象者を一人に絞れたの。」

「ど、どうしてだ？」

「眼鏡よ。」

「あ。」

カズヤがハツとする。

「私達が記憶の中で見た太刀川さんは、その顔こそ詳細に憶えていないものの、ぼんやりと眼鏡を掛けていたのだけは憶えている。そして、卒業アルバムの顔写真にあった写真でも眼鏡をかけている太刀川さんは、この人ただ一人しかいなかった。」

「じゃあ…。」

「そう、おそらくあの記憶の中に映っていた『太刀川』さんは、今から十六年前に卒業した、この『太刀川玲』さんで、間違いないと思うわ。」

ミサトがノートに書かれた太刀川玲の文字に赤ペンで大きく丸を付けた。

「まあ、普段は眼鏡を掛けているけど、卒業アルバムの写真撮影の時にだけたまたま眼鏡を掛けていなかったとか言う場合もあるかもしれないけれど、違ってたらその時にまた考えるわ。」

流暢に自分の推理を語り終えたミサトを見て、カズヤが驚嘆の声を漏らす。

「お前って、普段アホだけど、こういう時は天才だよなあ。」

「ん？ 何か言った？」

きらりと尖ったシャープペンシルを手に取り、笑顔で微笑み返してくるミサト。

「いえ、何でもありません。ミサトさん。」

「よろしい。さて、じゃあそろそろ帰ろっか。」

こうして、二人は図書室をあとにした。階段を降り、下駄箱の所で

カズヤが尋ねる。

「それで、明日はどうするんだ？ やつぱり行くのか、その太刀川玲さんって人の所に。」

尋ねられたミサトが、上履きを下駄箱に戻しながら答える。

「ええ、勿論よ。住所を見てみたらこのすぐ近所みたいだし。明日の朝にでも行ってみるわ。」

下駄箱に置いてあった運動靴に履き替えるミサト。一方のカズヤも運動靴に履き替え、下駄箱の外へと出る。

「俺も一緒に行こうか？」

「え、いいよ。習字あるんでしょ？」

「いや、習字は昼からだから。朝だけなら付き合っよ。」

「バカッ！ 付き合うだなんてそんな……。」

もじもじとするミサト。そんな様子のミサトを冷ややかな表情で見つめるカズヤ。

(いやいや、ミサトさん。残念ながら、それは無いから。)  
これ以上ツッコむと面倒な気がしたカズヤがミサトの肩をポンと叩く。

「じゃあ、明日の朝九時に校門の所で待ってるから。」

「うん、じゃあまた明日ね。」

「おう。」

次の日。土曜日の朝。二人は午前九時少し過ぎに校門前で落ち合い、そのまま『太刀川玲』という女性の自宅へと向かった。

「それで？ その太刀川って人の自宅はここからすぐ近くなのか？ 歩きながらカズヤが尋ねる。

「うん、丁度学校から五分くらいの所らしいよ……って、あった！ あそこよ！」

ミサトが彼らの少し向こうにある、茶色い屋根をした二階建ての家を指差す。それからしばらくして、二人は玄関前のインターホンの



前に立ち尽くした。

「そういえば、何て理由で来る事にしてるんだ？」

「え？ そんなの何も考えてないわよ。」

あっけらかんとした表情でミサトが答える。そんなミサトの反応にカズヤが動揺する。

「何も考えてないって、お前バカッ！ 何もなしに来て、会わせて下さいなんて言っても不審がられるだけだろうが！」

「えー。じゃあカズヤだったらどうするの？」

「そりゃあ、昔の卒業生が今どんな風な生活を行なっているか、社会活動の一環で調べに来ましたとか何とか…」

「じゃあ、それで。」

そう言うやいなや、ミサトが何の躊躇いもなく、インターホンを押した。ピンポン！ と威勢の良い音が室内に響き渡る。

「バカ！ お前、何勝手に押してんだよ？ ちよつとは待てっつーに！」

「まあまあ。大丈夫だって。」

『はい？ どちら様ですか？』

インターホンから五十代前後の女性の声が聞こえる。その問い掛けにカズヤが少し慌てながら返答をした。

「あ、はい。突然の訪問、申し訳ありません。私達、笹宮小学校六年二組のものなのですが、社会科の授業で卒業生達の今を調べに行こうという企画で尋ねたのですけど、もし宜しければ一度お話願えないでしょうか？」

カズヤが語り終わるとしばらくの間、沈黙の時間が流れたが、十秒ほどして

『ええ、いいですよ。』

という声が聞こえてきた。

「本当ですか？ ありがとうございます！」

インターホン越しに深々と頭を下げるカズヤ。

『それじゃあ、ちよつと待っててね。』

インターホンからそう言われた後、二分ほどしてから、玄関の扉が開かれた。

「はい、こんにちは。それじゃあ二人とも、とりあえず中にいらっしやい。」

出てきたのは先程の声の主であろうと思える五十代前後の女性だった。髪には若干の白髪が混じり、長めの髪を後ろで一つに留めている。しかし、顔全体の表情は非常に柔和な印象を与える優しそうな女性だった。

「それでは、失礼します。」

女性に促され、二人は室内へと入っていった。

二人は六畳ほどある和室の客間に通された。部屋の中央には木製のテーブルが敷かれ、二人はテーブルの脇に置かれた座布団に腰を下ろしていた。

「お待たせ。」

女性が、麦茶を二杯お盆に載せて入って来た。やがてそれらを二人の前にそれぞれ置き、二人とは対面するように、テーブルの反対側に座った。

「初めまして。私はこの家で主婦をしています太刀川照子と申します。今日は何でも卒業生の話を聞きに伺ったそうね。」

「こりと微笑む照子。その表情を受けて、カズヤが自己紹介をする。」「はい。本日は急な訪問申し訳ございません。えっと、笹宮小学校六年二組の野上カズヤと申します。こちらの女の子は同じクラスの橘ミサトさんです。」

「初めまして、太刀川さん。橘ミサトです。」

外行き用のにこやかな笑顔で、礼儀正しい挨拶をするミサト。

「はい、こんにちはミサトさん。綺麗なお嬢さんね。きっと将来美人になるわよ。」

照子のその言葉にまんざらでもない表情を浮かべるミサト。

「…それで、今日は卒業生達の今を調べに伺ったと？」

照子が、本題を切り出す。その問い掛けにカズヤが答えた。

「はい。一応確認させて頂きたいのですが、照子さんは笹宮小学校の卒業生で宜しかったでしょうか？」

ここで、即座に『太刀川玲』の事を聞かずに、まずは（おそらく母親である）照子に卒業生の当否を問い尋ねたのは、目的となる話の前にワンクッション置く事で相手の警戒心を無くし、話の流れの中で自然に『太刀川玲』の情報を聞き出すためだった。

「ええ、確かに私は四十年前の笹宮小学校の卒業生です。」

その発言を受け、カズヤが二つ目の質問を問い掛ける。

「じゃあ、旦那さんや、お子さんなども同じ卒業生なんですか？」

「いえ、旦那の方は会社の方で知り合いましたので、小学校は全く別です。ただ、娘の方は、そうですね。同じ笹宮小学校の卒業生です。」

「へえ、娘さんがいらっしやるんですか？」

ごく自然なイントネーションでカズヤが相槌を打つ。

「…ええ、まあ。」

「名前は何て言うんですか？」

「玲です。王へんに、命令の令を合わせた玲という漢字を使っています。」

ビングゴ。カズヤが心の中でガッツポーズをする。そして本題に切り込んだ。

「ちなみに、娘さんは今どうされているんですか？」

その質問を問い掛けた瞬間、照子の表情がわずかに鈍り、室内の空気がどんよりと濁った。何か間違えた？ カズヤがそう思った次の瞬間、ミサトがカズヤの背中を小さく叩き、照子の向こう側にある仏壇に視線を向けると目で合図する。カズヤが仏壇に視線を向けた時、カズヤは全てを理解した。仏壇には、若い女性の写真が飾られており、おそらくあれは、彼女照子の娘、玲という女性の写真なのだろう。という事は…。

「…娘さん、亡くなられているんですか？」

申し訳無さそうに、その言葉を述べたカズヤ。その言葉を受け、照子が静かに頷く。

「…はい。私達の一人娘、玲は七年前に交通事故で亡くなっています。いえ、どうかお気になさらずに。もう随分と昔の事ですから…。」

「寂しげな表情を浮かべる照子。そんな照子の表情を受け、カズヤは何も問い掛けられなくなってしまった。」

「それじゃあ、お疲れ様。社会科の授業頑張つてね、二人とも。」

玄関口。照子が二人に別れの言葉を送る。

「はい。ありがとうございます。本日はお忙しい中ありがとうございます。ありがとうございました。」

すっかり元気の無くなったカズヤとは対照的に、随分と元気な声でミサトが謝辞を述べた。あれから、カズヤの起こした失態をカバーするかのようになり、ミサトが上手くインタビューを進めていったのだが、肝心のカズヤはすっかり意気消沈してしまった。おそらくあれから、自分がどんな質問をしていたかさえ、カズヤはまともに覚えていないだろう。照子に別れを告げ、帰り道を歩き出す二人。しばらくして、カズヤがようやく声を出した。

「…お前、気付いていたのか？」

その言葉に、ミサトが前を向いたまま答える。

「ええ、部屋に入って、しばらくしてからね。仏壇に女性の写真が置いてあったから。普通、余程の事じゃないと仏壇に誰かの写真なんか置かないでしょ。だから何となくピンときたのよ。ただ、その事を言おうとしたら、ちょうど太刀川さんが部屋に入って来ちゃって言い出せなかったのよ。ゴメンね。」

カズヤの方を向き、両手を合わせるミサト。対するカズヤは、終始空ろな表情で答える。

「いって。はぁ……。俺、物凄いKY発言だったな。今年第一位だよ。」

海より深い、大きな大きな溜め息をするカズヤ。

「そうね。第一位だったわね。まあ、でも男子なんてほとんどKYみたいなもんだし、カズヤは同じ学年の男子の中では、まあまあ空気読める方だから、そんなに気にしなくてもいいと思うわよ。」

「…それ、慰めてくれるのか？」

「まあ半々？ それにしても困ったわね。まさか男の子だけじゃなく女の子までも、この世にいないというのは予想外だったわ。」

「完全に行き詰ったな。」

「せめて、男の子の名前だけでも分かると良いんだけど……。」

両腕を組み、思案顔を浮かべるミサト。カズヤがそんな様子のミサトを眺めていると、二人は小学校入り口の校門に到着した。

「とりあえず、俺、今日はもう帰るわ。これから習字もあるし。」

「うん。私はもうちょっと考えてみるから。」

「それじゃあ、また月曜日、学校でな。」

「うん、またね。」

カズヤが手を振り自宅の方へと歩き去っていく。一人残されたミサトは、小さく唸りながら道を歩いていた。すると突然、後ろから男性の声が聞こえた。

「もしもし、お嬢さん。」

その声にミサトが振り向く。

「何ですか？ っていうか、誰ですか、あなた？」

「ははっ。私はただの売れない画家ですよ。そんな事よりも、随分とお困りのようですね。もし宜しければ一度お話頂けませんか？」  
そう言って、男は右手を差し出した。

## 最終話

週が明けた月曜日。空はどんよりと曇っていた。カズヤが六年二組の教室に入り、自分の席にランドセルを下ろす。するとそこへ、ミサトが声を掛けてきた。

「カズヤ、おはよ。」

「あ、ああ、おはよ。あれからどうだ？ 何か進展とかあったのか？」

その言葉に少し俯いた表情になるミサト。ミサトのそんな表情に不安を抱き、カズヤが声を掛ける。

「どうした？ 何かあったのか？」

「…実はね、あの後、帰り道で不思議な二人組に出会ったの。」

「へー、どんな？」

「一人は年齢二十代後半くらいで、金髪で、紺の作務衣を着ていたの。外国人風の男の人でさ。どう見ても住所不定無職っぽいのに、何か職業は画家とか言ってたの。」

「何だそれ。」

「でね、もう一人は何と、人間じゃなくて妖精なの！ 妖精！ ティンカーベルみたいなの！ 何かエメラルド色の服を着て背中に四枚の羽が生えているの！」

急に声のトーンを高くして、喋り始めるミサト。ミサトの話す荒唐無稽な内容に、カズヤが呆れた反応を示す。

「…おい、お前、それはウソだろ？」

「ホントなんだって！ で、その人達に今回の事を相談したら、この爆弾みたいなのを手渡されたのよ。」

鞆に手を入れて、カズヤの机の上に爆弾のような物をゴトリと置くミサト。机の上に置かれたそれを見て、カズヤが今まで我慢していたツッコミを、ようやく開放した。

「めっちゃくちゃ不審者じゃないかぁー！！」

カズヤのリアクションに、クラス中の視線が集まる。

「いいか、ミサト。そんなものはすぐに返してきなさい。もし返すのが無理なら、すぐにでも警察に届けに行きなさい。変な人達に爆弾を渡されたって言えば、警察もすぐに動いてくれるから。」

「大丈夫だつて。ほら、ここに赤字で『品質保証』って書いてあるし。」

(……手書きだけだな。)

その一言は、そつと胸の内に閉まったカズヤだった。

「で？ これをどうしたらいいんだ？」

「何でも、その画家さんによると、今回は誰かの未練が大きく関係しているようだから、まずはその未練を断ち切る必要があるんだつて。」

「ふーん。」

「でもどうやら断ち切る前に、まずはその地縛霊の張っている警戒線を解いて、彼の心の内を聞かなければならぬらしいの。」

「それでこの爆弾つてわけか。」

カズヤが椅子に座り、机の上に置かれた爆弾を手にとってまじまじと見つめながら答える。

「そう。その画家さんの話だと、このままもう一度、真夜中の図書室に行っても前回と同様、彼の警戒線に跳ね返されてしまうだろうから、まずは入った直後にその爆弾を投げ入れて、彼の警戒線を解かなければならない、という事らしいわよ。」

「随分とワイルドな解決方法だな。」

「それとね、あともう一つ貰ってきたんだけど……。」

「まだ何か貰ってきたのか？」

「ただ、これの意味が良く分からなくて……。」

そう言いながら鞆の中から、その手渡された物を机の上に置くミサト。置かれた物は、何とマイクだった。

「何だ、これ？ ただのマイクじゃないのか？」

カズヤがマイクを手に取り、不思議そうに眺める。

「その画家さんが言うには、そのマイクは『ゴーストスピーカー』  
と言つて、思い描いて現れた幽霊と、直接会話する事のできる特別  
なマイクらしいの。」

「へえー………………。分かった。もうツッコまない。何もツッコま  
ないから取り敢えず話だけでも聞かせてくれ。質問はその後にする  
から。」

両手を挙げ、降参するポーズを取るカズヤ。その反応を見てミサト  
が説明を続ける。

「うん、このマイクはね、出てきた幽霊にマイクを持たせる事で、  
その人が何を言いたいのか、喋らせる事の出来るマイクらしいわよ。  
ただ、このマイクは一人につき一本しか有効範囲を持たないって  
うのが気に掛かっていて……。」

言い終えて、再び俯きがちになるミサト。ミサトの言葉にカズヤも  
反応を示す。

「何だ、そりゃ？ 今回俺らが話を聞きたい幽霊は、男の子と女の  
子の二人いるっていうのに、一本だけじゃ必要な本数が足りないじ  
ゃないか。おい、ミサト、お前ちゃんとその人に説明したのか？」

「勿論したよ！ ただ、画家さんは、今回はこれで大丈夫って……。」

「一体、どういう事なんだろうな……？」

二人が揃って思案顔を浮かべていると、後ろから誰かが近付いてき  
た。担任の佐藤だった。

「はい、カズヤ君、ミサトさん。始業のチャイムはとっくにしまっ  
てますよ？」

二人が声の方を振り向くと、佐藤は怒りに満ちた笑顔を浮かべてい  
た。佐藤のこの顔が一番不機嫌な顔であると知っている二人は、少  
しばかりの苦笑を浮かべ、早急にお互いの席へと座っていった。

「はい、みなさんおはようございます。早速ですが、カズヤ君とミ  
サトさんは放課後、職員室まで来て下さい。その、爆弾のようなも  
のとマイクのようなものは、先生が放課後まで預かっておきます。」  
いつもと変わらぬ淡々とした口調で、佐藤がホームルームを始めた。



放課後。二人は担任の佐藤の机の前に立たされていた。佐藤が爆弾とマイクを机に置き、二人に話し掛ける。

「さて、これは一体どうしたのですか？」

丁寧でありながら、冷徹に満ちた声が職員室に響く。その問い掛けにカズヤがゆつくりと口を開いた。

「一昨日、ミサトさんが知らない人から渡されたそうです。」

その言葉を受け、佐藤は視線をミサトに向ける。

「本当なのですか？ ミサトさん？」

ミサトは黙って頷いた。ミサトの反応を見て、佐藤が椅子に大きく背凭れる。そして一息付き、口を開いた。

「分かりました。どうやらあなた達には直接関係が無いようなので先生の方で警察に連絡しておきましょう。ですが、いいですね？

学校に、このような不審なものを持ってきてはいけませんよ？」

黙って頷く二人。しかし内心、二人ともこのままではマズいと焦っていた。なぜなら、ここで佐藤に画家から譲り受けたアイテムを処分されては、もう二度と事件解決の糸口が掴めなくなると考えていたからだ。そこで、ミサトがたまらず声を上げようとしたその時、彼らの背後から別の先生が声を掛けてきた。

「おや、相川君、なんだい？ その爆弾とマイクみたいなものは？」

二人が視線を向けると、教頭の鴻上が、佐藤の後ろから机の上を眺めるようにして覗き込んできた。鴻上の年齢は五十代後半。白髪まじりの薄い頭髪だが、愛嬌のある性格で、生徒達から随分と人気のある先生だった。例えば、担任の佐藤が急な用事などで学校を休む場合には、この鴻上が彼らのクラスの授業を受け持つ事もあり、カズヤ達生徒からして見ても、この鴻上はとても頼り甲斐のある心強い先生だった。そんな鴻上に対し、佐藤が頭を下げながら答える。

「あ、すみません、鴻上先生。どうやらこの子達が、見知らぬ男からこんな奇妙な物を渡されたようなのです。」

「ほう。」

机の上の爆弾とマイクを手に取り、まじまじと見る鴻上。そこへミサトが声を掛ける。

「あの！ 鴻上先生！」

名を呼ばれた鴻上が視線を向ける。

「はい、何でしょうか？」

「どうして、佐藤先生の事を『相川』って呼んだんですか？」

その質問に、鴻上が笑って答える。

「ははは。そうか、君達は知らないかもしれないね。実は佐藤先生は三年ほど前にご結婚されたのだけど、結婚する前は『相川』姓だったんだよ。つまり、佐藤君は婿養子って訳だな。」

「え？ でもだったら、佐藤先生の方で呼んだ方がいいんじゃないですか？」

ミサトが続けて質問を述べる。その質問を問い掛けられた鴻上が、頭を抱えながら答えた。

「いやね、僕としてはやっぱり教え子である佐藤君は、当時の呼び名の相川君で呼んだ方がしっくりくるんだよ。いやあ、年を取ると修正が利かなくて困るね。ははは。」

「え…。じゃあ…。」

「そう、君達の担任、佐藤君、旧姓『相川』君は、僕の十六年前の教え子だったんだ。しかもクラスも丁度君達と同じ六年二組だね。いや、僕も年を取ったね。ははは。」

瞬間。ミサトの頭に『ある仮説』が浮かんだ。勿論その『仮説』に根拠は無かったが、ある意味では運命とも呼べるような何かをミサトは感じ取り、気が付くと、その『仮説』を口にしていた。

「じゃあ、同じクラスに『太刀川玲』さんという、女の子がいますんでしたか？」

その言葉を受け、鴻上が懐かしい表情を浮かべる。

「ああ、太刀川君か。懐かしいね。あの子はずっと図書委員をやっている。可愛い子供だったから今頃きつと美人になっている

だろうよ。なあ、相川君。」

「…ええ、そうですね。」

少し、翳の入った表情を浮かべる佐藤。その表情を見て、ミサトは頭の中にあつた『仮説』を確信へと変える。

「佐藤先生！」

ミサトが声を張り上げる。

「ど、どうしたんですか？ ミサトさん？」

佐藤が虚を突かれ、驚きの表情を浮かべる。

「今日の午後九時。私達と一緒に図書室まで来てくれませんか？」

「お願いです！ きつと太刀川さんも会いに来てくれるはずですから

！」

頭を大きく下げ、懇願するミサト。彼女のただならぬ対応に、佐藤もただ言葉少なげに了承したのだった。

午後九時。外は弱い雨が降っていた。カズヤとミサト、そして担任の佐藤の三人は、図書室のある校舎二階の突き当たりを目指して廊下を歩いていった。しばらくし、図書室の前へと到着すると、ミサトがドアの前で立ち塞がり、右手に画家から渡された爆弾を持って、語り始めた。

「先生。私達は四日前、この図書室に入り、そこで不思議な記憶を見ました。その記憶とは、次のようなものです。図書室の受付に一人の女の子が座っていました。そこへ、一人の男の子が一冊の本と図書カードを持って、女の子の元へやってきました。やがて男の子は女の子から図書カードを受け取ると、そのまま走って図書室の外へと駆け出してしまいました。ここまでが事実です。」

佐藤は黙ったまま何も話さない。ミサトが構わず続ける。

「ここからは主観ですが、女の子、男の子ともひどく顔を赤らめ、恥ずかしげな表情を浮かべていました。おそらく、これは私の勝手な想像ですが、この子達は、お互いの事が好きだったのではないで

しょうか？」

外では小さな雨が静かな雨音を立てている。

「それから私達は、ここで見た記憶を調べていく内に、ここの記憶で見た女の子は、十六年前にこの学校を卒業した『太刀川玲』さんという女の子だという事を突き止めました。一方の男の子の方は結局分らないままでしたが、私は、もしかしたらと思い、今回ここでこの質問を先生に尋ねてみたいと思います。もし違っていたら、どうぞ遠慮なく言って下さい。」

ミサトの唇が、ついにその『仮説』を口にした。

「私達がここで見た記憶の男の子は、先生、旧姓『相川昇一』という名前の男の子ではないでしょうか？」

辺りに沈黙が訪れる。ミサトが俯き、カズヤが視線を佐藤に向ける。一分ほどしてからだろうか。佐藤が口を開いた。

「ああ、そうだ。私『相川昇一』は『太刀川玲』さんと同じ六年二組の生徒だった。そして、私は当時太刀川さんの事が好きだった。懐かしい名を聞いたよ。もう随分前の記憶のはずなのに、今日君達からその名を聞いた途端、まるでつい昨日の事のように記憶が蘇ってきた……。」

天を仰ぎ、優しげな表情を浮かべる佐藤。そして佐藤が視線をミサトに向ける。

「それで？ 太刀川さんも今日ここに呼んでいるのかい？」

やはり先生はそう考えていた。ミサトはそう思った。この事実を担任の佐藤に告げる事は、随分と心苦しかったが、やはり真実を告げるべきだと思い、ミサトはそれを口にした。

「先生。太刀川さんは、七年前に交通事故で亡くなっています。」

「そんな！ 太刀川さんが？ それは本当かい？」

狼狽する佐藤。そんな様子を見て、ミサトが重苦しそうに声を出す。

「はい。私達が太刀川さんの家に行った時、仏壇に彼女の写真が置かれていました。」

「なんて事だ……。」

がつくりと頂垂れる佐藤。そこへミサトが次の言葉を述べる。

「さて、先生。先生は今この学校で噂になっている心靈現象の話聞いた事がありますか？」

「あ、ああ。勿論だよ。君達もよく騒いでいるし、他の先生方も随分と気にされてらっしゃるからね。」

「実は、私は当初、この学校で騒がれている男の子の幽霊は、何らかの理由でこの世に未練を抱えている自縛霊のようなものだと思っていました。しかし、幽霊の正体が先生の少年時代、相川昇一という男の子だと分かった時、私の中で幽霊の正体は全く別のものになりました。つまり……。」

そこまで言って、カズヤが何かに気付いたように大きな声を上げる。「そうか！ 男の子の霊は自縛霊じゃなくて、先生の未練が生んだ生霊だったんだ！」

カズヤの辿り着いた真相に、ミサトが頷く。対する佐藤は、馬鹿馬鹿しいといった様子で首を左右に振っている。

「はは。未練なんて、そんなのある訳ないだろ？ 一体何年前の話だと思っているんだい？」

「そうですね？ それじゃあ、過去の自分に未練の正体を聞いてみてはいかがでしょうか？」

そう言ってミサトが手に持っていた爆弾を高らかに上げる。

「それは……？」

佐藤がたまらず声を掛ける。

「これは、とある画家さんから貰った幽霊の結界を解く爆弾です。

今からこの図書室に投げ入れて、先生の未練の具現化である生霊と対面したいと思います。いいですね、先生？」

問い掛けるミサト。その迫力に気圧されながらも頷く佐藤。そして、ミサトは図書室のドアを開け、その中に爆弾を投げ入れた。

図書室に爆弾を投げ入れると、ボンッ！ という大きな音と共に、

オレンジ色の粉塵が入り口の隙間から漏れ出してきた。しばらくしてドアを開けると、そこは強い光を浴びたような、真っ白に光輝く空間が広がっていた。その空間内へ、三人はゆっくりと入っていった。高さも広さも無い真っ白な空間。そこをしばらく進んでいくと一人の女の子が図書室の窓口で、一人静かに本を読んでいた。するとそこへ一人の男の子が、一冊の本と、手紙のようなものを持って走ってやってきた。

「あ、相川君、おはよう。」

女の子が、相川と呼ばれた男の子に向かって声を掛ける。

「う、うん。おはよう。」

対する相川は随分と、しどろもどろだった。

「ねえ、あの本読んでくれた？ 面白かったでしょ？」

「う、うん、あ、あのさ……。」

「ん？ なあに？」

顔を真っ赤にして何かを言おうとする相川。そんな彼の口から出てきた言葉は次のようなものだった。

「次の面白い本、紹介してよ。」

「うん、いいよ。これなんかオススメかな。あ！ あとこれなんかも面白いよ。それ……。」

そしてしばらくして、図書カードを受け取り、窓口を走り去っていく相川。走り去っていく途中、手に持っていた手紙がはらりと地面に落ちた。ミサトがそれを手に取り、封を開け中身を見ている。その手紙には、一言だけ、こう書かれていた。

『お誕生日おめでとう』

そして次の瞬間には、三人は元の図書室へと戻っていた。真っ暗闇の図書室の中、強く降り出した雨音だけが大きく部屋に響いている。「あれが、先生の未練の正体だったんですね？」

長い沈黙を終え、ミサトが静かに口を開いた。その言葉を受け、佐

藤が答える。

「ああ、あの日は丁度、太刀川さんの誕生日だね。それで僕はあの手紙を持って彼女に告白しようと思書室へ向かったんだ。しかし、いざその時が迫ると怖くなってね。結果は見ての通り、何も出来ないまま終わってしまったという訳さ。」

「でも、別に誕生日を逃してしまっただからといって、それで終わりという訳ではないでしょう?」

ミサトが佐藤に反論する。

「ああ、確かにそうだ。だが、僕は、どうした事か、あの日、お誕生日おめでとの一言が言えなかった自分が許せなくてね。それで、もう太刀川さんを好きになる資格なんか無い。そんな事を考えるようになったんだよ。ただそれは、今にして思えば……。」

「逃げていただけだろ?」

今まで沈黙していたカズヤが佐藤に向かって問い掛ける。

「ああ、確かにその通りだ。それ以上でも、それ以下でも無い。全く、意気地の無い話さ。」

そこまで言い終え、窓の方へ歩き始め、窓の外をずっと眺め続ける佐藤。

「しかしまさか、僕の未練が何年も経って、こうして母校で亡霊となって現れてくるとはね。ふふ。全く、困った卒業生だな。」

自嘲の笑みを浮かべる佐藤。そこへミサトが声を掛ける。

「先生。」

呼ばれた佐藤が振り向く。

「確かに私は先程、太刀川さんは、亡くなったと答えました。しかし、もう一度会えるとしたら、どう思いますか?」

「なっ……そ、それは一体……」

(どういう事だ?) と佐藤が問い掛ける間もなく、ミサトの横に青白い幽霊となった女性の姿が現れた。そう、七年前に亡くなった太刀川玲、その人だった。

「これは『ゴーストスピーカー』と言って、とある画家さんから渡

された幽霊と喋る事の出来るマイクです。先生。どうか、逃げずに太刀川さんと向き合ってください。」

それだけ言つて、マイクを太刀川に渡すミサト。太刀川はマイクを手に取り、ゆっくりと喋り始めた。

『久し振りね、相川君。』

「あ、ああ、小学校を卒業して以来だな。本当に綺麗になった。」

『フフ。そんなお世辞も言えるようになったのね。昔はあんなに恥ずかしがり屋だったのに。』

「まあ、僕も年を取つたつて事さ。」

『もう聞いていると思うけど、実は私七年前に交通事故で死んじゃつたの。驚かせてごめんね。』

「いや、いいつて。あのさ、太刀川さん。」

『ん？ なあに？』

あの時と同じ表情と言葉で尋ねる太刀川。そして佐藤がその言葉を口にした。

「ずっと好きだった。今日は会えて良かったよ。ありがとう。」

しばし訪れる沈黙の時。そして太刀川が口を開いた。

『こちらこそありがとう。でもね、相川君。女の子はね、やっぱり『その時』に言つて欲しいの。想いが強く高まつているその時に、その気持ちを伝えて欲しいし、受け止めて欲しいの。だから、好きだったなんて、過去形の告白はされたくないの。ごめんなさいね、相川君。』

少し困つた表情をして佐藤を見つめる太刀川。そんな太刀川に佐藤は静かに笑つて応えた。

「ああ、済まなかつたね、太刀川さん。」

『じゃあ、またね。』

「ああ。」

右手を挙げ、軽く挨拶をする佐藤。そして太刀川はゆっくりと消えていった。そしてその姿が完全に見えなくなると、マイクだけが残され、静かに地面へと落ちていった。佐藤が大きく一息付き、二人



に向かつて声を掛ける。

「さて、夜も遅いんだから早く家に帰りなさい。」

もうそこには、彼らの担任である『佐藤先生』の顔しか残されていなかった。

「まあ、要するにアレよね。男なんてみんな、未練がましいって事よね。」

次の日の昼休み。カレーライスを口一杯に頬張りながらミサトが語り始めた。そんな容赦の無い辛辣な言葉を浴びせたミサトに対し、カズヤがフォローを入れる。

「お前なあ、それはちよつと言い過ぎだぞ。先生だって、そういう紆余曲折を経ているから今の先生がある訳で……。」

「カズヤ。やけに先生の肩を持つわね。はあ。やっぱ男なんてみんなヘタレなのかなあ？」

添えつけのサラダを食べながら大きく溜め息をつくミサト。そこへ、カズヤが語りかける。

「そういえば、お前、どの辺であの男の子が佐藤先生だって分かったんだ？ 結果、上手くいったから良かったものの、もし間違っていたらとんでもない事になっていたぞ？」

「ああ、ホクロよ。」

「ホクロ？」

「そう。あの男の子も佐藤先生も、右目の目尻に小さなホクロがあるでしょ？ それで、もしかしたらあの男の子は佐藤先生なんじゃないかって思ったのよ。まあ、確証が無かったから、正直ハラハラしてたんだけど、結果オーライだったから助かったわ。」

牛乳を飲みながら、とんでもない観察眼をさらつと披露してみせたミサト。

（俺、こいつといつつも一緒にいるけど、一体どれだけ観察されているんだ、俺？）

そんな恐ろしい事を考えつつも、今度鏡を見る時は、自分の顔の、ホクロの数を数えてみようと思うカズヤだった。こうして、学校の怪談として騒がれた図書室の幽霊騒動は、静かに幕を閉じたのだった。

(終)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5463m/>

---

学校のカイ談

2010年10月9日00時24分発行